

日本とオランダの  
13歳の日常から見たもの

HRI主任研究員

中間真一

# 子どもが大人に なるとき



情報化、都市化が高度に進行する現代社会では、  
子どもを取り巻く環境も大きく変化している。  
そうした中、「自律した大人」へと成長するには、  
どんなプロセスを経ることが望ましいのだろうか。  
日本とオランダの13歳に実施した  
調査をもとに考察してみた。



## 早熟なのか、幼稚なのか

最近、幼稚園児や小学生の態度が「子どもらしくない」という声をよく聞く。その一方で、大学生や若者に対しては「子どもっぽい」とか「大人げない」という声が投げかけられている。子どもから大人になるといふプロセスが、うまく働かなくなったのか。

確かに、子どもたちを取り巻く環境は、私たちが子ども時代を過ごした60年代と比べると、大きく変化してしまっただ。その変化を加速させた要因は、メディア環境、都市環境、家族環境、教育環境などが考えられる。あの当時、テレビはようやく一家に1台入り、子どもたちは白黒映像の「巨人の星」や「コメットさん」に夢中になっていた。東京といえども、そこらじゅうに空き地があり、子どもが秘密基地用の空間を探すのはたやすいことだった。父親は仕事に没頭し、母親も家事に忙殺され、子どもをペットのようにかわいがるようなことはなかった。もちろん、小学校3、4年生のうちから夜遅くまで進学塾で勉強するような子どももいなかった。

しかし現在は、小学生でも自分のメールアドレスを持ち、インターネットの世

界を自由に駆け巡る。家の外は危険で遊びづらい。小学校中学年ともなると、週の半分以上は塾や習い事で埋まっているという子が多数派だ。大人顔負けにスケジュールを調整し、アポをとってから友だちの家に集まりTVゲームを楽しむ。結果的に、学校と習い事の時間以外は、親の視界の中でちんまりと過ごすというのが、今の子どもたちの現状だ。

これは、ある面から見れば、とても恵まれた、安全な、護られた子どもたちの生活世界と映る。しかし見方を変える、時間に追われ、情報におぼれつつ、会社や組織に依存して生きる大人の生活世界とほとんど変わらないと見ることもできる。

## 「脳化社会」の中で 大人になるといふこと

今、社会は情報化、都市化が高度に進みつつある。このような社会を、解剖学者の養老孟司氏は「脳化社会」と名付けた。こうした社会に生まれ、子ども時代を過ごし、自律した大人へと成長するには、どのようなプロセスをたどることが望ましいのだろうか。かつての子どもたちの生活世界とは何が違うのだろうか。「自律社会への生き方の変化」を研究

テーマとするHRIでは、この問題がとも重要であると考えた。

以上のような問題意識から、私たちは子どもを対象としたテーマに取り組んできた。本稿では特に子どもから大人へと変わり始めるプロセスを意識して、昨年実施した調査結果の一部を紹介しながら、「脳化社会」を生きる子どもたちの、自律した大人へのプロセスの要件について考えてみたい。

### 13歳という節目

人間の生き方をテーマとするとき、人生の節目・折りに着目すると、さまざまなものが見えてくる。では、子どもから大人へと変わる節目はどこにあるのか。成人式をはじめ、さまざまなとらえ方があるが、今回の調査では、13歳という年齢に着目した。

この根拠について簡単に説明すると、世界の多くの社会で通過儀礼や教育カリキュラムの節目が13歳あたりに設けられていることがある。発達心理学の観点からも、この時期あたりに大きな変化点が存在することが主張され、「児童」から「青年」へと変わる時期としてとらえられている。この点については、村瀬学氏の著書「13歳論」にも詳しく述べられて

いる。社会の変化により、かつての通過儀礼の区切りは変わってしまったという意見もあるが、日本においては、小学生と中学生の差は今でも大きい。

この調査は、日本の13歳と、オランダの13歳を対象とした。なぜ、オランダなのか。大きな理由は次の二つだ。一つは、「自律社会」という近未来社会像を想定するとき、オランダ社会は「ホルダーモデル」と称されるように、成熟度と完成度の高いコンセンサス社会として見るに値すると考えたこと。もう一つは、オランダの教育制度は、「12歳の選択」という言葉があるほど、将来への進路を決める最初の大きな節目を12歳から13歳になる段階に設けているからだ。

### オランダの13歳、日本の13歳

この調査は、2001年1月～4月にかけて、日本とオランダにて実施し、それぞれに約700名の回答を得た。性別や地域差、オランダの場合には通学校のタイプについても偏りのない結果が得られ、両国の13歳の日常生活や、その中での人間関係、将来展望などに関する興味深い基礎生活データが得られた。

### 夜は大人の時間

生活スタイルの基本として、起床時刻と就寝時刻のデータを見ると、両国の間には、就寝時刻に大きな違いが見いだされた。オランダの13歳の平均就寝時刻は21時32分。日本の子どもでいえば、小学校中学年の平均就寝時刻に近い。これに対して日本の13歳は22時58分。1時間半もの差がある。これは単に、オランダの13歳が幼いと理解してよいのだろうか。

オランダで13歳の子どもがいる家庭を、晩に訪問してインタビューをしたときも、彼らは夜の時間を持つていないように感じられた。夕食後のだんらんの時間は、日本からの訪問者に興味津々で、リビングルームで一緒に話をしたりしているが、9時過ぎになると自分の部屋に行ってしまう。自分の部屋で勉強か趣味の世界にふけるのか、それともテレビを観るのかと思ひ、両親に尋ねると、「もうベッドに入る時間です。夜は大人の時間ですから」という答えが返ってきた。

しかし、そんなオランダの13歳でも、金曜日だけは夜遊びが許される。多くの13歳が、友だちと連れだつて街に繰り出すのだ。私も金曜の夜遅く、街の中心にある広場に出かけてみたが、そこはたくさんのお客たちであふれ、盛り上がりがあった。騒ぎは午前0時を過ぎても収まら

なかったが、13歳になるとこうした夜遊びが許されるという。このように、一段階大人の時間に足を踏み入れるのが、オランダの13歳なのだ。

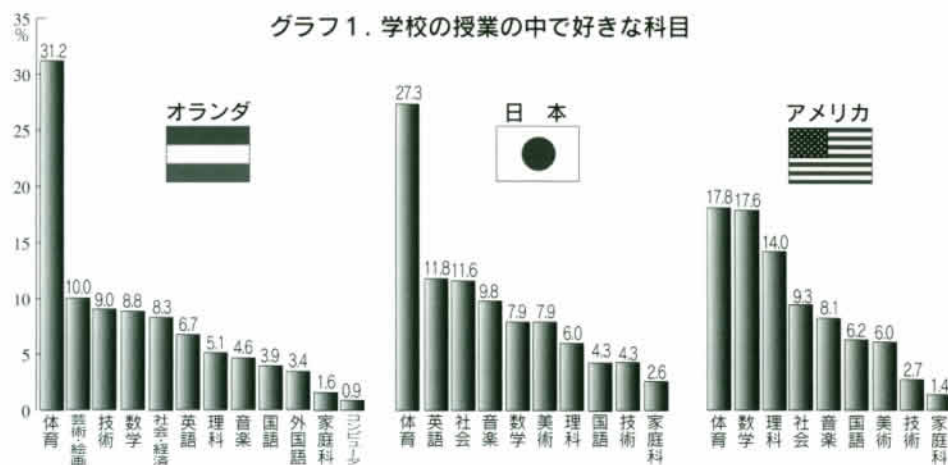
一方、日本の13歳は夜に塾通いする子どもが多いこともあり、就寝時刻が22時以前というのは、わずか6.2%に過ぎない。約60%が23時以降と答えている。夜の時間の過ごし方については、自分の部屋で塾や学校の勉強をしたり、TVゲームをしたり、あるいはなんとなく過ごしているうちに12時近くになるという。日本の生活時間の中には、大人の時間も子どもの時間もない。それは誰かと過ごす時間でもない。大人も子どもも、なんとなく過ぎていく夜の時間を日常としている。

### 職業課目に人氣

学校生活については、両国の13歳とも、約80%が楽しいと感じている。オランダの場合、13歳の段階ですでに大学進学のための学校から職業学校まで4タイプの学校に分かれるが、学校生活の満足度には、学校タイプによる差はほとんどない。偏差値のような指標にたよらず、それぞれが納得して進学先を決めているせい、現在の学校に満足している子どもが多い。

また、彼らの好きな教科の結果を見る

グラフ1. 学校の授業の中で好きな科目



と、グラフ1に示すように、オランダ13歳の上位3教科は、体育、芸術・絵画、技術であり、日本の13歳は体育、英語、社会であった。今、日本の教育界で問題となっている理数系離れの傾向は、この結果からも明らかだ。彼らから聞いた話では、「数学や理科は、わからないという以前に、つまらない」という。

日本の中学1年生にとって新鮮であり、インターネット時代の世界共通語になりつつある英語が、彼らにとって魅力的なのは理解できる。好奇心が湧き起らなければ、生きた学びにはつながらない。同様に、13歳という節目の学びとしては、テクニクとしての数学、知識としての理科ではなく、考える術としての数学、驚きの中にある原理としての理科という学びの姿に変えられないものだろうか。なお、アメリカで実施した調査からは、体育、数学、理科が、ほぼ差のないポイントで上位3教科となる結果を得ている。

そして、オランダの13歳が、好きな教科に芸術や技術を挙げているのは興味深い。これらの教科は、本来は最も個性を発揮できる場であるが入試科目ではない。だから、特に興味のある子や、得手としている一部の子を除いては「どうでもいい科目」となっている。しかし、オ

ランダの子どもたちは、素直にこれら好きな科目トップ3の中に入れていく。

「大人」に対する敬意と自律

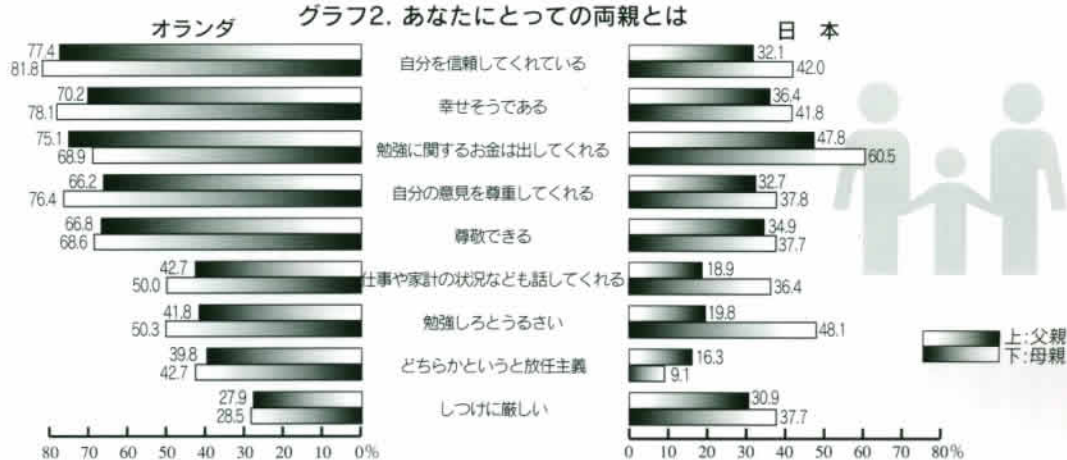
彼らの両親について聞いた結果がある。グラフ2に示すとおり、ほぼすべての項目で、オランダの13歳にとっての両親の方が、日本の13歳にとっての両親より存在の意味が大きい結果となった。

「尊敬できる」「幸せそうだ」という子から親への意識、「自分を信頼してくれている」「自分の意見を尊重してくれる」という親から子への意識、これらの設問に対する両国間のポイントの差は、大きな問題を提示している。オランダには、大人と子どもという関係を確実に踏まえて、子どもも一人の人間として認めるという、相互の信頼と自律のもとにある親子関係が明らかにあって、日本では見つけにくいものとして浮かび上がる。

親子の会話についての質問では、日本の13歳の方が特に母親との会話の密度が高く、密着度の高い親子関係が表れている。二つの社会の間には、大人と子ども、親と子の境界や自律した相互関係の有無が、明らかな差として見えてくる。

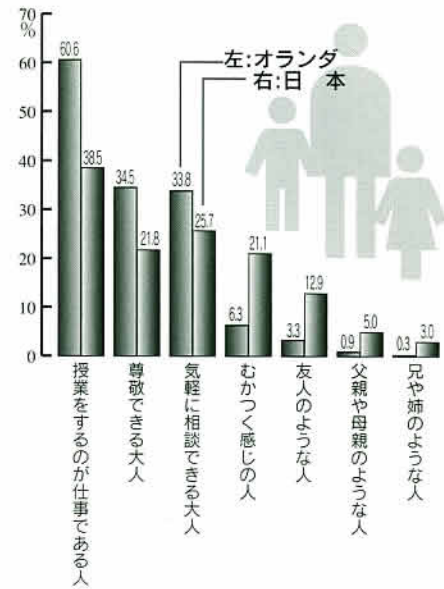
こうした差は、彼らの学校の先生に対する意識(グラフ3)からもうかがえる。オランダの13歳は、「授業を職業とする

グラフ2. あなたにとっての両親とは



大人」「尊敬できる大人」「気軽に相談できる大人」という、自分たちとは違う「大人」という見方を強く持っている。これに対して、日本の結果の中には、「むかつく感じの人」「友人のような人」という、オランダの結果からはほとんど得られなかった回答が目立った。身近な生活世界である家庭や学校にいる大人と自分とを、距離を持ちつつ、つながりも考えられるようなオランダの13歳の意識からは、自律した大人へと成長するための、無理のないステップアップのプロセスが感じられる。

グラフ3. あなたにとっての学校の先生とは



彼らの友人とのつきあい方を聞いた結果も特徴的だった。グラフ4のとおり、オランダの13歳の半数を超える57%が、「相手を傷つけてしまうので、あまり本音は言わない」という態度があてはまると答えている。この結果について、オランダの知人は、「最近の若者は、うわべのつきあいしかできなくなっている。これは、ある種のコンセンサス社会の弊害かもしれない」と言った。

現地でのインタビューで、この結果に関連するやりとりがあったことも思い出される。ある女の子は「小さかったとき

グラフ4. 友人とのつきあい方



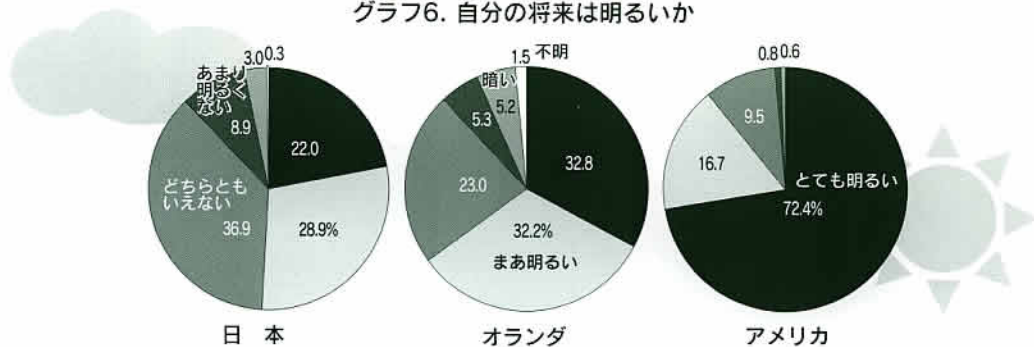
はともかく、今はもう相手に対して本音だけぶつけられよという年齢じゃない。議論もするし、アドバイスも求められればするけど、中学生になったんだから、お互いを認める関係でなきゃね」と言っていた。多様性の中の自律ということを考えるとき、自己主張と他者に対する尊重のバランスは、近未来自律社会を考える上での大きなテーマだ。

**将来展望を持って生きる**

最後に、彼らの将来展望に関する結果を紹介しよう。まずは、将来の進路や職業を13歳がどのように考えているかだ。グラフ5のとおり、将来希望する職業を持っているのは、オランダで63%、日本で約50%。日本の13歳に最も多い回答は、「何が向いているかわからない(37.8%)」である。これに対して、同じ回答を選んだオランダの結果は17.4%と、日本の半数にも満たなかった。

「13歳で、将来の職業を決めている方がおかしい」、今の日本の中学1年生を想定すれば、考えられないのが当然だ」という意見もある。しかし、13歳ではまだ将来への展望を持たなくてもよいのだろうか。将来への希望を持って生きるということは、よく生きるための最も重要な条件の一つではないのか。それこそが、

グラフ6. 自分の将来は明るい



よい大人になるための要件ではないのだらうか。

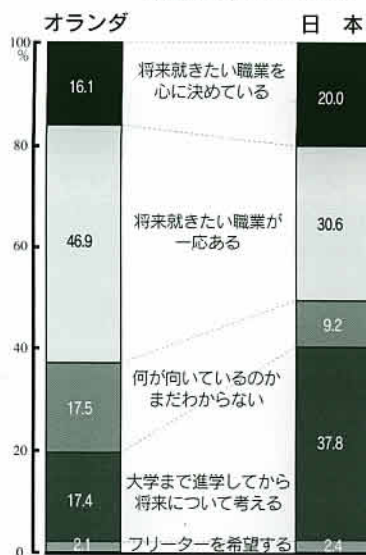
これに関連して、「自分の将来は明るい」という設問の結果も紹介する。グラフ6のとおり、「そう思う」と答えた子の比率はオランダで65%、日本で50・9%と、10ポイント以上の差があった。また、この設問についてのアメリカの結果を紹介すると、なんと89・1%の13歳が「自分の将来は明るい」と回答しているのだ。この差は、子どもが大人へと成長しようとするプロセスに大きな作用を及ぼすことは間違いない。

### 子どもから大人への社会の連続性と断絶性

ここまでさまざまな観点から、オランダと日本の13歳の生活と意識を考察してきた。比較文化型調査では、どうしても日本社会の改善すべき点を中心とする考察になりがちだ。しかし、単に日本の姿を嘆くだけでは意味がない。現実には、タとして表れた両国間の13歳の意識差は、大人になるためのプロセスを考える上で、多くの示唆を含んでいる。

大人と子どもの境界をあいまいにするのではなく、大人の時間、大人の空間、大人の価値が明らかに存在し、子どもの自

グラフ5. 将来の進路や職業の希望を持っているか



分が、どのように「なりたい大人」へのプロセスをたどるのか。少なくとも、それを考えながら成長し、学びを増幅させる社会としてオランダ社会を見れば、「自律社会」へ向けた日本の子どもたちの大人へのプロセス、そのための学びのあり方のヒントが得られるはずだ。

それは、すなわち動機と好奇心を絶やさず、増幅させながら一段一段踏み上がることのできる、自分の意志以外の要因で断絶させられることのない大人への道であろう。自律した大人に成長するため

の子ども時代。この問題意識から発したときの親子関係、学校という学びの場、社会のさまざまな装置とプログラムのあ

り方をより具体的に示すために、今後ともこのテーマを重視して研究を進めていきたい。

昨年公開されて日本映画史上最高の興行記録を打ち立てた、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』は、トンネルの向こう側にある『お湯屋』という不思議な世界を、素直な10歳の子どものまなざしから見事に描き出したものだと感じる。私たちは、『お湯屋』を大人社会と重ねて納得してはいけぬ。『自律社会』としての大人の世界は、異界や魔界ではなく、人間らしい成長の結果にたどり着ける場として築きあげたいものだ。